

賢いジェネリック医薬品 との付き合い方 数量ベース 30% 時代の保険点数の インセンティブを勝ち取るために

横井正之 著

メディカルドゥ/A 5・172 頁・2,940 円

厚生労働省が、平成 24 年度までにジェネリック医薬品の数量シェア 30% 達成を目標としている現在、医療現場、特に保険薬局ではジェネリック医薬品との付き合い方に関して多くの議論がなされている。そんななか本書は、薬剤師向けにジェネリック医薬品を解説し、実際の使い方を提案している。サブタ

イトルからは保険点数に関連した細かいノウハウが記されているのでは、と思ってしまうが内容はいたって実直であり、ジェネリック医薬品の使用に関してこそ薬剤師が自身の責務を正しく認識し、能力を発揮するべきということが全体を通しての主張である。

前半はジェネリック医薬品と関連用語の解説から始まり、現在のジェネリック医薬品が過去のそれとどう違うのか、さらに最も誤解が多いと思われる先発品との生物学的同等性試験について等がまとめられている。後半部分は、薬局でのジェネリック医薬品使用(促進)に際しての考え方やトラブル回避の方法、Q&A コーナーなど、より具体的な内容である。先発医薬品がもはや存在しないジェネ

リック、先発医薬品より高い(費用がかかる)ジェネリック、先発医薬品と適応症が異なるジェネリックなど、薬剤師はひとつひとつの処方に対応深く対応する必要があり、その苦勞が思いやられる。

そんな状況でもこれをむしろいい機会ととらえ、薬剤師が真の高度専門職となるチャンスであると説く筆者の姿勢に共感を覚えると同時に、ジェネリック医薬品に関する医療現場の現状を知るという意味で、薬系大学や製薬企業の関係者にも一読を薦めたい。

佐藤康夫 Yasuo SATO

※本書は、日本薬学会「薬学情報コーナー」で閲覧できます。